

皇室典範増補

明治四十年二月五日決議

天祐ヲ享有シタル我カ日本帝國皇家
ノ成典ハ祖宗ノ洪範ヲ紹述シテ敢テ
違フコトアルナシ而シテ人文ノ發展
ハ寰宇ノ進運ニ隨ヒ制度ノ燦備ハ條
章ノ増廣ヲ必トス是ノ時ニ當リ朕ハ
祖宗ノ丕基ヲ永遠ニ鞏固ニスル所以
ノ良圖ヲ惟ヒ且憲章ニ由テ以テ皇族

ノ分義ヲ昭カニセムコトヲ欲シ茲ニ皇
族會議及樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ皇室
典範増補ヲ裁定シ朕カ子孫及臣民ヲ
シテ之ニ率由シテ懲ルコトナキヲ期
セシム

御名 御璽

年 月 日

國務各大臣宮内大臣副署

皇室典範増補

第一條 王ハ勅旨又ハ情願ニ依リ家

名ヲ賜ヒ華族ニ列セシムルコトア

ルヘシ

第二條 王ハ勅許ニ依リ華族ノ家督

相續人トナリ又ハ家督相續ノ目的

ヲ以テ華族ノ養子トナルコトヲ得

第三條 前二條ニ依リ臣籍ニ入リタル者ノ妻直系卑屬及其ノ妻ハ其ノ家ニ入ル但シ他ノ皇族ニ嫁シタル女子及其ノ直系卑屬ハ此ノ限ニ在ラス

第四條 特權ヲ剝奪セラレタル皇族ハ勅旨ニ由リ臣籍ニ降スコトアル

ヘシ

前項ニ依リ臣籍ニ降サレタル者ノ妻ハ其ノ家ニ入ル

第五條 第一條第二條第四條ノ場合ニ於テハ皇族會議及樞密顧問ノ諮詢ヲ經ヘシ

第六條 皇族ノ臣籍ニ入リタル者ハ

皇族ニ復スルコトヲ得ス

第七條 皇族ノ身位其ノ他ノ權義ニ

關スル規程ハ此ノ典範ニ定メタル

モノノ外別ニ之ヲ定ム

皇族ト人民トニ涉ル事項ニシテ各

適用スヘキ法規ヲ異ニスルトキハ

前項ノ規程ニ依ル

第八條

法律命令中皇族ニ適用スヘ

キモノトシタル規定ハ此ノ典範又

ハ之ニ基キ發スル規則ニ別段ノ條

規ナキトキニ限り之ヲ適用ス

秘

皇室典範增補審査報告

今面御諮詢ノ皇室典範增補ヲ審査スルニ本案
ハ皇室典範ノ條項中今後其ノ實行ニ困難ナル
モノニ關シテ不備ヲ補足シ并セテ皇族ノ身位
及權義ヲ明ニスル為ニ必要ナル條項ヲ增補セ
トスルモノナリ其ノ增補ノ條項中ニハ自ラ
民法其他ノ法律施行ノ範圍ニ對シ幾分ノ變更
及制限ヲ加フルモノアルヲ免レスト雖元來皇
室典範中既ニ普通ノ法律ノ除外タル條項少カ
シテ而シテ憲法第七十四條ニ牴觸セサル限り

既ニ皇室典範第六十二條ニ依リ修正増補ノ条
續テ豫見シタルモノアルカ故ニ他ノ法律ニ牴
觸シ其ノ結果自ラ臣民ノ權義ヲ變更若ハ制限
スルニ至ルモ法理上支障ナキ所ナリトス更ニ
其ノ各條ニ就テ之ヲ觀ルニ皇室典範第三十一
條ハ皇子ヨリ皇玄孫ニ至ルマテハ男ヲ親王女
ヲ内親王トシ五世以下ハ男ヲ王女ヲ女王トス
ト規定シ以テ皇室ノ子孫ハ累世皇族タルノ主
義ヲ取ル然レトモ皇族支胤ノ繁盛ニ伴ヒ皇室
經費ノ無限ノ膨脹ヲ来タスノミナラヌ皇族ノ

範圍萬一廣大ニ失スルカ如キコトアルニ至ラ
ハ或ハ反テ事態ノ不完備ヲ来タスノ虞ナキヲ
保セサルヲ以テ豫メ如此場合ニ備ヘムカ為メ
茲ニ疏通ノ途ヲ開キ第一條ニ於テ王ハ勅旨又
ハ情願ニ依リ家名ヲ賜ヒ華族ニ列セシムルコ
トアルヘキヲ規定シ尚ホ同一ノ趣旨ニ基キ第
二條ニ於テ王ハ勅許ニ依リ華族ノ家督相續人
トナリ又ハ家督相續ノ目的ヲ以テ華族ノ養子
トナルヲ得ルコトヲ規定セリ王既ニ勅旨又ハ
情願ニ依リ臣籍ニ入ラシムラレルコトアリト

セハ典範第五十二條ニ依リ特權ヲ剥奪セラレ
タル皇族ハ場合ニ依リ之ヲ臣籍ニ降スノ途ヲ
開クハ皇室ノ尊嚴ヲ維持スルニ於テ至當ノ措
置ナルヲ以テ之ヲ第四條ニ掲ケタリ凡ソ皇族
ノ權利義務ハ理宜ク皇室典範及之ニ基キ發ス
ル規程ニ依リ之ヲ定ムヘキモノトス典範實ニ
此ノ明條ヲ缺ク依テ第七條ニ於テ皇族ノ法律
上ノ地位ヲ明ニシ以テ皇族ニ關スル各種制度
ノ淵源ヲ示シ且ツ事皇族ト臣民トニ涉リ而モ
各適用スヘキ法規ヲ異ニスル場合ニハ何レノ

法規ニ依ルヘキヤ之ヲ一定スルノ要アルヲ以
テ此ノ如キ場合ニ方リテハ典範ニ基キテ制定
セラレタル法律ニ準拠スヘキコトヲ規定セリ
要スルニ本條ハ累世皇族ノ原則ニ對シ疏通ノ
途ヲ啓キ且ツ皇族ノ法律上ノ地位ヲ明ニシ以
テ皇族ニ關スル諸制度ノ淵源ヲ定ムトスル
ニ在リ其ノ趣旨何レモ至當ニシテ其ノ條項ニ
至リテモ亦何等支障アルヲ見サルノミナラス
今ニ於テ典範ノ備ハラサルヲ補足セムトスル
ハ寔ニ此ムヲ得サル所ナリト認ム

右審査の結果ヲ報告ス

明治四十年二月二日

審査委員長樞密顧問官子爵田中不二麿

審査委員樞密顧問官男爵細川潤次郎

男爵九鬼 隆一

侯爵蜂須賀茂韶

男爵伊東巳代治

子爵野村 靖

男爵金子堅太郎

男爵末松 謙澄

同 同 同 同 同

同

男爵清浦 奎吾

樞密院議長侯爵山縣有朋殿

参照

機密

帝室制度調査局總裁奏議

帝室制度調査局總裁奏議

臣博文帝室制度調査ノ

大命ヲ恪ミ伏シテ惟ルニ皇室典範ハ
陛下立憲ヲ經始シタマヘル制作ノ一
ニシテ帝國憲法ト竝ニ不刊ニ垂ル
而シテ國家ノ景運蒸蒸日上シテ丕變
シ皇室ノ基礎益鞏固ニシテ文經武
緯國光洽々寰宇ニ顯揚スルコト今
ハ迥ニ曠昔ノ比ニアラス加フルニ

各種制度ノ秩然大ニ備ハレルアリ
必ヤ進テ時運ノ趨ク所ヲ察シ諸ヲ
事理ニ衷シテ以テ合ヲ經猷ニ求メ
サル一カラス是ニ於テ乎皇室ノ
寶典モ亦聊カ其ノ未タ備ハラサル
モノヲ増補シテ以テ後昆ニ昭示ス
ルノ必要ヲ生ス即チ皇族支胤ノ繁
盛ト皇室費歟ノ増益トニ視テ其ノ
疏通ヲ圖ルカ如キ又皇族國法上ノ
地位ヲ昭ニシテ以テ其ノ權義ノ規

準ヲ定ムルカ如キハ特ニ其ノ尤ナ
ルモノニシテ實ニ日新ノ時宜ニ鑒
ミ乾健ノ宏綱ヲ進張スル所以ノ道
ナルコトヲ信ス茲ニ別冊皇室典範
増補條項ニ付キ慎重審議ヲ畢ヘ其
ノ事由ヲ各條ノ下ニ注明セシメ謹
テ上奏シ恭ク

聖裁ヲ仰ク

明治三十七年十月十二日

帝室制度調査局總裁候爵臣伊藤博文

参照

機密

皇室典範増補

皇室典範增補上諭文案

天祐ヲ享有シタル我カ日本帝國皇家
ノ成典ハ祖宗ノ洪範ヲ紹述シテ敢テ
違フコトアルナシ而シテ人文ノ發展
ハ寰宇ノ進運ニ隨ヒ制度ノ燦備ハ條
章ノ増廣ヲ必トス是ノ時ニ當リ朕ハ
祖宗ノ丕基ヲ永遠ニ鞏固ニスル所以
ノ良圖ヲ惟ヒ且憲章ニ由テ以テ皇族
ノ分義ヲ昭ニセムコトヲ欲シ茲ニ皇
族會議及樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ皇室

典範増補ヲ裁定シ朕カ子孫及臣民ヲ
シテ之ニ率由シテ愆ルコトナキヲ期
セシム

御名 御璽

年月日

國務各大臣、宮内大臣、副署

皇室典範増補

恭テ按スルニ皇室典範ハ明治二十二年ニ於
テ帝國憲法ト共ニ不磨ノ大典トシテ欽定セ
ラレ垂訓明燭ニシテ貽謀深遠ナルハ素ヨリ
揭焉トシテ日星ヲ瞻ルカ如シ而シテ寰宇ノ
進運日ニ躋リ帝國ノ光輝益揚リ從テ諸般ノ
制度具備セルノ今日ニ於テハ規型ヲ損益シ
典章ヲ變通スルノ必要ヲ生セサルコト能ハ
ス寔ニ是レ時ニ隨テ宜ヲ制スルノ道ニシテ
上ハ古先ニ紹キ下ハ來葉ヲ開ク所以ニ外ナ

ラサルナリ茲ニ典範第六十二條ノ文ニ基ツ
キ今ニ於テ其ノ増補ヲ圖ラサル一カラサル
モノ約兩大端ヲ舉ゲ敬テ之ヲ下ニ臚陳ス
皇室典範第三十一條ノ趣旨ヲ推スニ皇族ハ
子孫百世ヲ經ルモ仍其ノ身位ヲ享有ス親親
ノ恩誼焉ヨリ篤キハナシ諸ヲ大寶ノ令ニ稽
フルニ正親司ノ掌ル所ハ四世以上皇族ノ名
籍ニ止マリ爾後時ニ因革アルモ未タ雲仍ノ
遠支ニシテ永ク皇親ノ列ニ在ル者アラス蓋
其ノ制限洵ニ止ムヲ得サルモノアルニ由ル

ナリ今ヤ至仁ノ宏謨ハ已ニ曠古ノ特例ヲ開
カレタリト雖國運ノ進張ハ皇室ノ經用ヲ益
シ潢裔ノ繁盛ハ内帑ノ資給ヲ滋クス歲月ノ
悠久ニ隨ヒ勢無限ノ需ニ應シ難ク根幹ノ鞏
固ヲ圖レハ或ハ均霑ノ典ヲ曠クセムコトヲ
恐ル因テ既往ニ鑒ミ將來ヲ推シテ以テ之カ
疏通ノ途ヲ開カサル一カラサルモノ是レ其
ノ一ナリ

諸般制度ノ大成ニ從ヒ一般臣民ノ權義ハ一
律ニ確定セラルル所アリ而カモ帝國憲法ニ

基ツク普通法規ノ效力ハ之ヲ皇室典範ノ範
圍ニ屬スル皇族ノ上ニ及ホス一キ限ニ在ラ
ス則チ皇族ノ國法上ノ地位ハ將タ何ニ縁テ
以テ之ヲ明徴ニセムトスル乎皇室典範竝ニ
之ニ基ツキテ發スル諸規則タルヤ論ナキノ
ミ然レトモ典範ノ制定實ニ普通法規完備ノ
前ニ在ルカ故ニ一般臣民ノ權義未タ剖析セ
ラレサルニ先チ此等ノ事項ヲ豫測シテ之ヲ
定ムルニ由ナク今ニシテ之ヲ觀レハ終ニ闕
遺ニ類スルナキヤノ觀アリ因テ其ノ原則ヲ

増補シ以テ皇族ニ關スル各種制度ノ淵源ヲ
示ササル一カラサルモノ是レ其ノ二十リ
其ノ他特權ヲ剝奪セラレタル皇族ヲ臣籍ニ
降シテ以テ皇室ノ尊嚴ヲ瀆スノ虞ヲ防キ又
法律命令中適之ヲ皇族ニ適用ス一キモノト
シタル規定ニ對シテ融洽ヲ圖リタルカ如キ
ハ皆此ノ兩大端ノ増補ニ伴ヒ其ノ精備ヲ求
ムル所以ニシテ理甚觀易シ乃條々テ八條ト
シ序ヲ逐ヒテ其ノ下ニ分疏ス

第一條

王ハ勅旨又ハ情願ニ依リ家

名ヲ賜ヒ華族ニ列セシムルコトアル

恭テ按スルニ大寶令ニ凡皇兄弟皇子皆
為親王以外竝為諸王自親王五世雖得王
名不在皇親之限トアリ慶雲三年ノ詔ニ
五世之王在皇親之限其承嫡者相承為王
自餘如令ト云一リ延暦十年ニ至リ勅シ
テ令制ニ復ス弘仁五年ノ詔ニ曰思除親
王之號賜朝臣之姓編為臣籍後從事於公

出身之初一叙從六位ト天長九年ノ詔ニ
曰宜七世以下計數至于五世課役蠲除ト
貞觀十五年ノ詔ニ曰早停王號即賜朝臣
以節國家之經用頗加公謙之篤情ト抑惠
ヲ推シ德ヲ施シ以テ親親ノ恩ヲ顧念ス
ルト費ヲ節シ幹ヲ強クシ以テ皇室ノ尊
嚴ヲ保持スルトハ共ニ列聖深意ノ存ス
ル所ナリトス今皇室典範ハ皇室ノ子孫
累世皇族タルコトヲ失ハサラシムルノ
主義ヲ取ル此ノ増補ニ於テモ亦敢テ諸

王ヲ以テ悉ク臣籍ニ列ス一シトスルニ
非ス累世皇族タル典範ノ主義ヲ本則ト
シ唯勅旨又ハ情願ニ依リ家名ヲ賜ヒ華
族ニ列セラルルコトアル一キヲ規定シ
之カ變通ノ道ヲ開キ萬世ノ皇基ヲ鞏固ニ
セムトスルニ外ナラサルナリ

皇族ニ姓ヲ賜ヒ臣籍ニ入ラシメラレタ
ルハ先例甚多シ聖武天皇ノ朝ニ從三位
葛城王ノ請ヲ以テ之ニ橘宿禰ノ姓ヲ賜
ヒ桓武天皇ノ延暦六年ニ光仁天皇ノ皇

子諸勝ニ廣根朝臣ト賜ヒ皇子岡成ニ長
岡朝臣ト賜ヒ嵯峨天皇ノ朝ニ皇族男女
三十人ニ源朝臣ト賜ヒシカ如キ最顯著
ナルモノトス今姓ニ代フルニ家名ヲ以
テシタルハ今日復タ古ノ姓ヲ用ヰルコ
トナキニ由ル又華族ニ列セラルルモノ
トシタルハ天潢ノ末流ハ降リテ臣籍ニ
在リト雖仍宜ク尊榮ノ地位ヲ有セシメ
ラル一キヲ以テナリ

第二條

王ハ勅許ニ依リ華族ノ家督
相續人トナリ又ハ家督相續ノ目的
ヲ以テ華族ノ養子トナルコトヲ得
恭テ按スルニ王既ニ勅旨又ハ情願ニ依
リテ家名ヲ賜ヒ華族ニ列セシメラルル
コトアリ則チ其ノ出テテ華族ノ家督相
續人トナリ又ハ家督相續ノ目的ヲ以テ
華族ノ養子トナルコトヲ聽サルルハ事
ニ於テ妨ナキノミナラス亦前條ノ趣旨
ニ副フ所以ナリ其ノ家督相續ヲナスノ

目的以外ニ於テ華族ノ養子トナルコト
ヲ聽サレサルモノトシタルハ襲爵ニ依
リ尊榮ノ地位ヲ有セシメラレムコトヲ
期スレハナリ

第三條 前二條ニ依リ臣籍ニ入リタ
ル者ノ妻直系卑屬及其ノ妻ハ其ノ
家ニ入ル但シ他ノ皇族ニ嫁シタル
女子及其ノ直系卑屬ハ此ノ限ニ在
ラス

恭テ按スルニ王既ニ家名ヲ賜ヒ華族ニ
列セラルルトキハ倫序上自然其ノ妻及
卑屬ハ仍留リテ皇族ノ列ニ在ル一キ理
ナシ而シテ卑屬タルモ已ニ他ノ皇族ニ
嫁シタル女子ニ至テハ其ノ夫ノ身分

從て其ノ子ハ父ノ身分ニ從フヲ當然ト
ス因テ但書ヲ設ク

第四條

特權ヲ剝奪セラレタル皇族
ハ勅旨ニ由リ臣籍ニ降スコトアル

一シ

前項ニ依リ臣籍ニ降サレタル者ノ
妻ハ其ノ家ニ入ル

恭テ按スルニ王既ニ勅旨又ハ情願ニ依
リ臣籍ニ入ラシメラルコトアリ則チ
皇族ニシテ皇室典範第五十二條ニ依リ
特權ヲ剝奪セラルルカ如キコトアルト
キハ獨皇族ノ品位ヲ辱カシムルノミナ

ラス事態ニ依リテハ皇室ノ尊嚴ヲ汚ス
コトナキヲ保セス此ノ場合ニ於テ之ヲ
臣籍ニ降スノ道ヲ啓クハ至當ノ措置タ
ルヲ認ム續日本紀天平寶字五年ノ條ニ
茅原王罪アリ帝淳仁天皇宗室ノ故ヲ以テ法
ニ致スニ忍ヒス因テ王名ヲ除キテ姓ヲ
龍田真人ト賜ヒ多祓島ニ配流セラル此
ノ餘宗室ニシテ除名賜姓ノ譴ヲ蒙ル者
史冊ニ散見セリ固ヨリ敢テ新例ヲ創ム
ルニ非サルナリ

第五條 第一條第二條第四條ノ場合

ニ於テハ皇族會議及樞密顧問ノ諮
詢ヲ經ヘシ

恭テ按スルニ皇族ニシテ降リテ臣籍ニ
入ルハ事體極テ重シ即チ皇族會議及樞
密顧問ノ諮詢ヲ經ルハ微ヲ防キ濫ヲ杜
クニ在リ

第六條 皇族ノ臣籍ニ入リタル者ハ

皇族ニ復スルコトヲ得ス

恭テ按スルニ上下ノ名分一タヒ定リテ
復タ變易スヘカラサルハ我カ肇國以來
ノ通義トス中世一二臣列ニ降リシ皇族
ニシテ復タ親王トナリ或ハ竟ニ皇祚ヲ
踐ミタマヒシ宇多天皇例ナキニ非スト雖以
テ永世率由ス一キ恒範トナス一カラス
故ニ本條ハ分義ノ正キニ從ヒ宗潢ノ貴
ト雖降リテ臣籍ニ入リタル者ハ再皇族

ニ陞スヲ容ルササルノ制ヲ取レリ

第七條

皇族ノ身位其ノ他ノ權義ニ

關スル規程ハ此ノ典範ニ定メタル
モノノ外別ニ之ヲ定ム

皇族ト人民トニ涉ル事項ニシテ各
適用スルキ法規ヲ異ニスルトキハ
前項ノ規程ニ依ル

恭テ按スルニ皇族ノ國法上ノ地位ハ宜
ク皇室典範及之ニ基ツキ發スル準則ニ
依リテ定マル一キモノナリ然ルニ典範
中第六十一條ヲ除ク外此ノ主意ヲ推知

シ得一キ條項ヲ缺キ而シテ第六十一條
中ニ諸規則トアルモ之ニ重ヲ繫ケタル
ノ文義ニアラサルニ視テ普通ノ法律令
今ト對衡スヘキ身位其ノ他公私ノ權利
義務ニ關スル諸規則ヲ指示シタルモノ
ニ非サルコト自ラ明ナリ是ヲ以テ從來
此ノ點ニ關スル解釋區區ニ出テ法制亦
歸一セサルノ實アリ故ニ本條ヲ置キ皇
族ノ國法上ノ地位ヲ明ニシ以テ皇族ニ
關スル各種制度ノ根本ヲ定ム

皇族ノ身位其ノ他公私ノ權利義務ハ時
トシテ人民ト相涉リ互ニ其ノ據ルヘキ
ノ準則ヲ異ニスルコトアリ此ノ場合ニ
於テ干格ヲ來スノ虞ナカラシムカ爲
ニ^{特ニ}第二項ヲ設ク

第八條

法律命令中皇族ニ適用ス一
キモノトシタル規定ハ此ノ典範又
ハ之ニ基ツキ發スル規則ニ別段ノ
條規ナキトキニ限リ之ヲ適用ス

恭テ按スルニ皇族ノ國法上ノ地位ハ皇
室典範及之ニ基ツキ發スル準則ニ依リ
テ定マル一キモノナルモ法律命令ノ規
定中現ニ皇族ニ適用ス一キモノトシテ
定ムラレタルモノナキニ非ス之ヲ適用
シテ敢テ不可ナキニ於テハ此ノ典範ニ

基ツキ發スル諸規則ニ於テ一之ト重
複スルノ條規ヲ設クルノ必要ナシ且將
來ニ於テ普通法令ノ規定ヲ適用スルヲ
以テ却テ便トスルモノアラムコトヲ豫
期シ茲ニ併セテ其ノ準則ヲ定ム

秘

参照

第三十條 皇族ト稱フルハ太皇太后皇太后皇

后皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃親王親王妃
内親王王王妃女王ヲ謂フ

第三十一條 皇子ヨリ皇玄孫ニ至ルマデハ男
ヲ親王女王ヲ内親王トシ五世以下ハ男ヲ王女
ヲ女王トス

第五十二條 皇族其ノ品位ヲ辱ムルノ所行ア
リ又ハ皇室ニ對シ忠順ヲ缺クトキハ勅旨ヲ
以テ之ヲ懲戒シ其ノ重キ者ハ皇族特權ノ一

部又ハ全部ヲ停止シ若ハ剝奪スヘシ

第六十一條 皇族ノ財産歳費及諸規則ハ別ニ

之ヲ定ムヘシ

第六十二條 將來此ノ典範ノ條項ヲ改正シ又

増補スヘキノ必要アルニ當テハ皇族會議

及樞密顧問ニ諮詢シテ之ヲ勅定スヘシ